アダムズとギャラティンと共和国の運命

大井浩二

ヘンリー・アダムズが1879年に出版した『アルバート・ギャラティン伝』(1)は，歴史家としてのアダムズの最初の重要な仕事であった。ジェファソンとマディソンのもとで財務長官を務めたギャラティンの残した文書の整理を遺族から依頼されたのは，アダムズがハーヴァード大学で1789から1840年にかけてのアメリカ史の講義を始めた頃であった。ギャラティンが祖父 J. Q. アダムズと深い関わりを持っていたというだけでなく，とくにアダムズ家の一員としてのヘンリーを名指しで依頼してきたという事情もあったので，彼としては折角の申し出を断わる理由はなかった。六カ月がかりで，まず3巻本の『アルバート・ギャラティン著作集』(1879) を完成したあと，つづいて取り掛かったのが678頁に及ぶ大冊の『ギャラティン伝』であった。

だが，この伝記の主人公であるアルバート・ギャラティンとは，一体いかなる人物であったのか。はたしてこれほどに長大な伝記を書くにふさわしいアメリカ人であったのか。アメリカ史の専門家はともかく，普通の読者にとって，この名前はそれほど知名度が高いとはとても言えないだろう。せいぜい二人の大統領に仕えた財務長官であったことが記憶されている程度であって，彼が建国直後のアメリカ合衆国の指導的な立場にある政治家であったことや，ガン条約の締結にあたってベンジャミン・フランクリンの再来と言われるほどの手腕を発揮した外交官であったことなどを知っている読者の数は限られているにちがいない。ましてや，彼がインディアンの研究で有名な学究であって，アメリカ民族学協会を設立し，アメリカ民族学の父と呼ばれていることを知っている

一般の読者は皆無である，と言い切ってよいだろう。

こういった事情は，なにも現在のわれわれに限られているのではない。すでに彼の伝記をアダムズが手がけた時点においてさえも，ギャラティンは忘れ去られた存在になっていた。アダムズ自身，この事実に気づいていて，「議会の指導者としての評判」も，「財務長官としての理論や方法や業績」も，「外交官としての名声」もすべてが遠い過去のものとなってしまい，「アメリカ経済の権威」としての彼が著わした書物の題名さえ記憶する者もいない，と書いていた。そして，晩年のギャラティンが携わっていた民族学の研究こそ，「栄誉に対する彼のもっとも永続的な権利」であると述べて，彼がアメリカ民族学の父であることを紹介しているが，そのアダムズですら，民族学者としてのギャラティンの業績には，700頁近い伝記のわずか2頁を割いているにすぎないのである。忘却の淵に沈んでしまったかに見える人物について，アダムズがこれほどに詳細な伝記を書いた理由は何なのか，といぶかしく思う読者がいるとしても不思議ではあるまい。

さらに，この伝記を書くためにアダムズがとった方法もまた，一般の読者の興味をかき立てるとは思われない。全体は大きく5部に分けられ，それぞれに「青春」「議会」「財務省」「外交」「晩年」という題名がついているが，章分けがまったくなされていないために，たとえば「財務省」と題する第3部では財務長官としてのギャラティンの生活ぶりに関する叙述が226頁にわたって延々と続くのである。この伝記にはまた，ギャラティン文書に保存されていた手紙や，アダムズがワシントンで見付けた公文書が丸ごとふんだんに引用されているだけでなく，ジュネーヴ生まれのギャラティンが若い頃に書いた手紙や彼の祖母に宛てたヴォルテールの手紙，あるいは外交官時代の彼とスタール夫人との往復書簡がフランス語の原文のまま印刷されている。その点について，この伝記の大部分は「このような形でしか陽の目を見る可能性のない資料を歴史家に提供することを意図している」とアダムズは説明し，フランス語の手紙を翻

訳しなかったのは「読者がフランス語を知らないことを仄めかすのは，常にいささか無礼である」と弁解している。だが，出版直後の書評は好意的とは言えず，かつて彼自身が主筆を務めた『北アメリカ評論』のそれは，『ギャラティン伝』が「歴史の真の研究者にとって情報の貴重な宝庫」であることを認めながらも，「あまりにも大部で，資料のダイジェストという性格があまりにも強いため，一般の読者の関心を惹くことはできない」[8] と批判的であった。

しかし，アダムズは，このギャラティンという地味な人物の伝記執筆に情熱を傾けただけでなく，それを「報酬を期待しない仕事（labor of love)」とさえ呼んでいた。「わが国の卓越した人物に関する長年の研究のあと，才能と剛直と知識と無私と社会的適性が結びついている点で，ギャラティン氏に匹敵する者はいない，とこれまで以上に確信している」というアダムズの見解につづけて，アーネスト・サミュエルズは「政治的理想にぴったりと合ったシンボルを熱烈に求めていた彼は，ついにそれをギャラティンのなかに見出したのだった」[9] と説明している。『ギャラティン伝』の読者としては，そこに主人公の生涯の細部に関する事実を探ろうとするよりも，むしろアダムズが抱いていた理想の政治家像がどのような形で映し出されているかを考えるべきではないか。一人の政治家をめぐる客観的な伝記のなかに，著者自身の主観的な意見を読み取ろうとし始めたとき，このまことに単調な『ギャラティン伝』はにわかに生気を帯びてくるように思われるのである。

ギャラティンがジェファソン大統領のもとで財務長官に就任したことを述べた第3部の冒頭で，アダムズはアメリカ共和国の本質についての議論を展開している。1801年に「ジェファソン氏を道案内とする新しい政治勢力」が政権の座についたが，「ジェファソン氏の哲学の主題」とは一体何であったか，と問いかけたアダムズは，それを「博愛主義的あるいは人道主義的な教義（doctrines)」と定義した上で，その教義は「ヨーロッパの政治の動きの外に立っているアメリカは，独自の政治的展開を遂げることができる。アメリカは遠隔の

地の危険を無視しても安全である。軍備は単なる治安維持の必要をすこし上回った程度まで縮小できる」などといった「きわめて単純な要素」に還元できると論じている。さらにアダムズは「そうした教義を瓦解する恐れのないまでに確立させることは，民主政治を成功させることであり，そうした教義の確立を遅らせることは，『負債と堕落と腐敗』のイギリスがたどった道をたどることに必ずなると言わないまでも，その危険を冒すことであった」と説明している。そして，「借金をするという誘惑は大きな危険であり，借金の支払いは民主主義的な原理（principles）の偉大なドグマであった」と付け加えている。

ここでアダムズが引用している「負債と堕落と腐敗」という表現は，ジェファソンがギャラティン宛に書いた手紙（1809年10月11日）で用いられているが，その手紙のなかでジェファソンは，「共和国の運命」が「公債の償却」に大きく依存していることを認め，もし負債が増大した結果，完全な支払いが不可能となった場合には，「われわれは負債と堕落と腐敗というイギリスの道をたどることを余儀なくされるだろう。それゆえに負債の返済は，われわれの政府の運命にとってきわめて重大な事柄である」と語っていたのである。ジェファソンは「負債と堕落と腐敗」に喘ぐイギリス，ひいてはヨーロッパとはまったく無関係な，純粋で完璧な美徳の共和国をアメリカに樹立することを希求していた，と言い換えてもよい。「ジェファソン氏とギャラティン氏とマディソン氏の頭のなかにあった計画」は，「新しい時代――誕生したばかりの人間の種族（a new era—a fresh race of men）の精神的，物質的発展に対する方策を講じ，それを指導することを目指していた」とアダムズは説明している。結局のところ，ジェファソンたちが実行に移そうとしていた「計画」は「アメリカ例外主義」（American exceptionalism）という「伝統的な政治理念」によって要約できるかもしれない。この「政治理念」は，クッシング・ストラウトによれば，「新しい共和国は，その建国にあたって，ほかの国ぐにの没落に一般的に見られる堕落に屈しないようにするために必要な手段を講じておいたの

で，人類にとっての範例となるだろう」という「建国の父祖たちの信念」[4]にほかならないからである。

だが，アダムズはジェファソンが例外としての共和国を夢見ていたことを指摘する一方で，「ジェファソン体制と呼ぶことのできるものの弱点」に光を当てることも忘れていない。それは一言でいえば「規則の厳格さ」ということになるだろうが，その点をさらに敷衍して，アダムズはつぎのように書いている。

> この体制は，純理論家の体制であって，アプリオリな論証の長所と短所を備えていることを告白しなければならない。その当時のほかのいかなる政治的な試みよりもはるかに抜きんでいて，もっとも博愛主義的なすべて，人類の最良の本性にもっとも大胆に訴えるすべてを疑いもなく表わしていたけれども，それは人間の情熱と悪徳に対してあまりにも配慮がなさすぎた。それは偏見と習慣に対立する意味での主義と理性の力にあまりにも絶対的に依存しすぎていた。それは剣がその議論の道具の一つではなく，平和がその存在に不可欠であることを，世界に向かってあまりにも公然と宣言しすぎていた。

結局のところ，共和国は人間性に対するナイーブなまでの信頼を基盤にしていたと言い換えてよい。だが，アダムズがふと洩らしているように，「人間性は相対的に完全であるにすぎない。絶対的な完全性は政治家が達成を要求されているよりも高い水準である」。絶対的に完全でない人間性を信頼するところから出発したアメリカ共和国は，「人間の情熱と悪徳」の故にもろくも崩壊することになった。ジェファソン体制の失敗は「主として人間性にあまりにも高い評価を置いていたという事実に原因があった」とアダムズは説明している。さらにまたアダムズは，ジェファソンによって代表されるリパブリカンズが「政治は原理によって規制されねばならぬ」と考えていたのに対して，「フェデラリスツは，政治は状況（circumstances）によって規制されねばならぬと答えた」と述べている。「原理」と「状況」という対立概念を持ち込むことによって，

アダムズはジェファソンのいう美徳の共和国がきわめて非現実的な基盤の上に成り立っていることを強調しているのである。そして，「アメリカ例外主義」という「原理」を根底から押し潰したのは，出港禁止令（1807-09）と，それにつづく第2次英米戦争という「状況」であったことは，あらためて書き立てるまでもあるまい。

すでに1803年のアメリカについて語ったときにも，アダムズはジェファソンが「彼の理論の力を過信していた」ことに触れ，「この理論的な教義の結果によって，ジェファソン氏の政権とギャラティン氏の財政上の希望の運命は左右されることになっていた」と書いていただけでなく，「この深刻な危険」は「次第にますます重大な様相を呈する運命にあった」と，共和国の暗い未来を予見するような発言をしていた。したがって，彼によって予言されていた「深刻な危険」が，たとえば出港禁止令という形をとって顕在化してきたとき，「それはアメリカ政府のお気に入りのドグマと教義に対する死刑の宣告となった。それはこのドグマと教義の愚かさを示す実例であった」という診断をアダムズは下すことになるのである。まったく同じ診断を第2次英米戦争に当てはめることができることは言うまでもない。いずれの事態も「新しい時代」と「誕生したばかりの人間の種族」の可能性ばかりを信じて，不完全な人間性を考慮にいれることを忘れた「純理論家の体制」が招来した結果にほかならなかったのである。

出港禁止令とその失敗の意味について，アダムズは別の箇所でも興味深い発言をしているが，それによると，「理論ではなく事実が，ジェファソンの政権の残骸のなかに生き続けているすべてであった。ほかの何よりもはっきりと姿を現わしている唯一の事実は，合衆国が二匹のブルドッグに痛めつけられている憐れなネズミに喩えることができるばかりであるということであった。そのネズミは戦わなくても食べられてしまう運命にあった」ということになる。ここでの「理論」と「事実」の対立がまえに言及されていた「原理」と「状況」

のそれに対応していることは明らかであるとしても，そこに用いられている弱肉強食的な闘争のイメージは否応無しに第2次英米戦争を連想させることになると同時に，『アメリカ合衆国史』(1889-91) のなかでも出港禁止令がそれに類似したイメージで語られていたことを思い出させずにはおかない。そこでのアダムズは，出港禁止令に失敗した結果，アメリカ人は「人類の共通の重荷を背負い，同じ血腥い闘技場で他の種族の武器を使って戦わなければならない」という発見をしはじめた，と述べていた。アメリカ人はまた，「自然の法則と人生の本能を免がれるという希望」を捨てて，「平和を情熱とみなす新しい政治家の方針は，戦争を義務とみなす野蛮な体制が到達したのと変わらない結果を生み出すことになる」という「確信」を受け入れざるを得なくなった[5]，と結論していたのである。

こうして，例外としてのアメリカ共和国という「原理」は，いかにもあっけなく崩れ去ってしまうことになる。アメリカ共和国もまた，ローマ以来のすべての共和国と同じように，いつかは時間の波に呑み込まれざるを得ない，きわめて悲劇的な存在であることをアダムズの『ギャラティン伝』は明らかにしているが，このアダムズの洞察は，共和主義の本質を鋭く言い当てているだけでなく，最近の J. G. A. ポコックなどの研究[6]を見事に先取りしている。「『ギャラティン伝』は単なる伝記であると同時に，失敗に終わる政治的熱望の検討であり，共和主義的理想主義は理想的に構想された社会の建設に失敗したという事実を指摘している」[7] というトニー・タナーの発言があらためて思い出されるのである。ともあれ，アダムズは上述のような共和国の理念の長所と限界を説明したあと，アメリカ合衆国がジェファソンの理想とする「純粋さのレベル」に到達したかどうかを検討するのが彼の目的であり，「その点においてギャラティン氏がいかなる影響を及ぼしたかが，この物語の過程で示されることになるであろう」と書いている。だが，『ギャラティン伝』を三分の一まで読みすすめた時点で，ジェファソン体制の「弱点」を知らされることになる読者

としては，一種のドラマチック・アイロニーを味わいながら，主人公ギャラティンの運命の展開を見守るほかはないのである。

アダムズは，財務長官時代のギャラティンを語るにあたって，彼がジェファソンやマディソンとともにローマのそれと同じような「三頭政治」をおこなっていたことを強調し，彼がアレグザンダー・ハミルトンに匹敵する人材であったという立場から，「ワシントンはハミルトンに主に依存していたし，ギャラティンがいなければ，ジェファソンは無力であったであろう」と述べている。現在の読者としては，忘れられた政治家ギャラティンが「ハミルトンの活力と能力」を備えていたことを聞かされるだけでも驚きであるにちがいない。だが，彼は「政治家であるだけでなく経済学者でもあった」という理由で，「当時のほとんどのアメリカ人，ハミルトン氏やジェファソン氏にも優る大きな長所をもっていた」とまでアダムズは主張している。とりわけ，「負債を忌み嫌っていた」ギャラティンにとって，「負債の返済は政治家としての第一原理であった」だけでなく，「ギャラティン氏は習慣的に，人間の情熱と本能に対してほとんど配慮をしなかった」というアダムズの指摘を見落としてはなるまい。ジェファソン体制について用いられていた表現のいくつかがここにそのまま繰り返されていることから考えて，ギャラティンはジェファソンの政治理念を体現した理想的な共和主義者であったと言い切ってよい。

財務長官としてのギャラティンは，ジェファソン大統領と一致協力して，「真の共和政治という基本的な原理」を大衆のなかに植え付ける仕事に取り掛かる。「暴力と濫費とヨーロッパの堕落」を蛇蝎視する彼の理想は，「新世界に偉大で純粋な社会」を築き，「ヨーロッパを蝕ばむあらゆる害毒から解放された，最良の状態にある人間の最初の実例」を全人類にさし示すことであった。彼が希求していた世界は，時間の支配を拒絶した，例外としての共和国にほかならなかった。「彼の理想の政府は，堕落と暴力から解放された政府，もっとも単純な必要が要求する以上に負債や陸海軍や税金をもたない政府であった」

とアダムズは述べているが，ギャラティンの財政方針は見事な成功をおさめ，「この国を債務から解き放つという大目的」は着実に達成される。たとえば，1803年のアメリカについて，アダムズは「この国はこれほどの平和と満足と繁栄をそれまでに享受したことはなかった」と書いている。やがて「真に共和主義的な政府を樹立するという義務が果たされる」瞬間が目前に迫ったことを知ったジェファソンは，「彼の最後の遺産」として何を人類に残すべきかをギャラティンたちと検討しはじめる。だが，ギャラティンの「理想の政府」も，まえに触れた出港禁止令の実施によって，「ほとんど一瞬のうちに」打ち砕かれることになった，と『ギャラティン伝』の著者は記している。こうして，わずか8年前に「地上の新しい時代の先駆け」として歓迎され，「希望と抱負」にあふれていたジェファソン体制はあっけなく崩壊してしまったのである。

すでに触れたように，出港禁止令の失敗は，「状況は，その性質上，人間よりも強力で永続的でなければならない」という事実によってもたらされた。「彼の理論と希望のすべて」が押し潰されたのを悟ったとき，「楽天的で柔軟なジェファソンでさえも堅固な大地が足元から揺らぐのを覚え，彼の勇気は消え失せた」とアダムズは述べている。「かつての自信」を失い，「精神的ショック」を受けた彼は，すっかり「怖じけ付いて」しまった結果，「以前にも以後にも大統領がしたことがなく，いかなる大統領もそうする権利を憲法で認められていないことをやってのけることになった」。つまり，ジェファソンは大統領職の義務を放棄して，すべてをマディソンとギャラティンに委ねてしまったのである。歴史家ジョージ・バンクロフトに宛てた手紙（1879年4月25日）のなかで，アダムズは「ジェファソンははたしかに臆病者であったというのが私自身の意見です」[8]と断言している。他方，ギャラティンはジェファソンと同じように「楽天的」であったが，彼とは「異なった素質の持ち主であった」ので，財務長官の職務を放棄することなく，「出港禁止令の唯一の論理的帰結」である英米戦争に対処することを決意する。なぜなら，「彼は敗北を受け入れ，状

況に順応する術を，理論を捨て，自分の世代とともに動いて行く術をもっとよく知っていた」からである。現在の彼は「状況の無限の力」を十二分に認識していた，とアダムズは書いているが，同時にまた，「彼はもはや彼を導くべき原理をもっていなかった」という一文は，例外としての共和国を目指した建国の父祖たちの理想主義的な「理論」が「人間の情熱と悪徳」の前に脆くも崩れ去る運命にあったことを雄弁に物語っている。ギャラティン自身，ジェファソンに宛てた手紙（1809年11月 8 日）のなかで，「私たちが一致して主張し，あなたの在職中は立派に支持されていたあの原理は，もはや信奉されていない」ことをはっきりと認めている。だが，「理論」をあっさり捨てたギャラティンが「状況の無限の力」を受け入れて，「自分の世代とともに動いて」行ったという事実は，彼が人間性への信頼を完全に失ってしまったことを物語っている。ジェファソンが政権をとったとき，「人間性が新しい姿を現わすことになると信じていた」ギャラティンにとって，それは政治家としての敗北以外の何物でもなかったのである。

だが，このことはギャラティン自身が誰よりも明確に意識していた。ガン条約が締結され，「彼の人生の一つの偉大な時期」が終わった1814年12月25日，それまでの生きざまを振り返ったギャラティンは「いくつかの非常に不愉快な結論を避けることができなかった」とアダムズは書いている。たしかに，財務長官になった当時の彼と較べると，「より成熟し，より賢明になり，はるかにずっと経験を重ねてはいた」が，「ギャラティンは，政治家にとって，経験や智慧や成熟よりも重要ないくつかの資質をまだ失ったままであった」。その失われた資質の一つが「人間性に対するあの崇高な信頼」であったことはあらためて説明するまでもあるまい。彼の「政治家としての仕事」は「哲学的でアプリオリな原理を犠牲にして具体的な事実を処理するための単なる努力」になってしまっていた。ここにもまた何度目かに「事実」と「原理」の対立が持ち込まれているが，それによって「哲学的でアプリオリな原理」つまり共和国の理

念から遙かに遠ざかっているギャラティンの姿勢を浮彫りにすることを，アダムズは狙っているのではないか。さらに，「不愉快な」「崇高な」「単なる」といった形容詞の羅列からも，ギャラティンの感慨というよりは，むざむざと「事実」の世界に埋没してしまっている理想主義者ギャラティンに対するアダムズ自身の苛立ちを感じとることさえできるにちがいない。もし「人間性に対するあの崇高な信頼」が彼のなかで完全に死に絶えたままで終われば，『ギャラティン伝』は壮大な失敗の記録とならざるを得ないからである。

ところがギャラティンは，彼の生涯がけっして共和主義者の敗北と絶望に終わった生涯でなかったことを，その最晩年に証明してみせる。1844年4月24日，テキサス併合に反対して開かれた抗議集会の議長役を務めた彼は，「厳粛な条約の条項への違背の上に築かれた不当な戦争」を激しい言葉で非難したあと，「長い生涯の最後の公的な行為がこの無法な企図に抗議する行為であったことを大いに喜んでいます。自由と正義と私たちの国を守るため，この機会に私の消えそうになる声を高くあげたことは，本当に心からの満足です」と語っていた。アダムズはそれを「彼の生涯のもっとも勇気ある行為の一つ」と呼び，そこに「彼の精神的な勇気の強烈な証明」を読み取って，84歳のギャラティンを駆り立てたのが「この上なく良心的な義務感」であったことを指摘していた。メキシコ戦争が開始されると，彼は「メキシコとの講和」や「戦争の経費」と題するパンフレットを配布して，アメリカ国民の良心に訴えようとするが，アダムズはこのギャラティンの「最後の知的努力」を激賞して，「彼が人間性に対する信頼を放棄しようとしなかった」ことを確認している。「人間性に対する信頼」を崇高とさえみなしていたアダムズにとって，ギャラティンはたしかに「政治的理想」のシンボルにほかならなかったことを，ここでの彼の熱っぽい語り口から，読者ははっきりと理解することができるのである。

こうした老共和主義者へのアダムズの共感を端的に示しているエピソードを最後に紹介しておきたい。J. Q. アダムズといえば，外交官や上院議員として

の生活を送ったあとで国務長官や第6代大統領を歴任した人物であり，晩年の彼の姿が『ヘンリー・アダムズの教育』(1907) の第1章で印象深く描かれていたことを記憶している読者も多いにちがいない。ギャラティンが講和会議の代表の一人としてペテルスブルグに赴任したとき，当時ロシア公使であったジョン・クィンジーと親しく交渉する機会が生まれる。勿論，一方がニューイングランドの旧家の出身であれば他方は外国訛りを残したジュネーヴからの移民といった具合に，まったく異なる背景をもち，政治的にも相容れない意見や目的を抱いていた。『ギャラティン伝』の著者も指摘しているように，「両者のそれ以前の経歴には，相手に信頼や好意をかき立てるようなものはほとんど無かった」けれども，「にもかかわらず，この二人の生涯と性格には奇妙なパラレリズムがあった」ことも疑えない。とりわけ，晩年の二人は「ともに超党派的であった。ともに義務と時代の欠点に関しては非常に強い確信を抱いていた。ともに共和国の初期の政治精神の最後の遺物として，ほぼ同じ時期に世を去った」のである。

それだけに，1844年11月，ニューヨーク歴史協会がギャラティンのために催した晩餐会に招かれたジョン・クィンジーが語った言葉は印象深いと言わねばなるまい。「この世でもう一度あなたと握手ができれば光栄である」というギャラティンの手紙の一節に心を動かされて出席することにしたと前置きして，この元大統領は「私の政治家としての生涯において交渉のあったすべての公人のなかで，意見が一致した場合であれ異なった場合であれ，私はつねに彼を正直で名誉を重んじる人物であると考えてきました」と述べていたのである。ギャラティンとジョン・クィンジーにとって，「正直」は「最高であるばかりでなく，きわめて稀でもある公徳の一つであった」とアダムズは解説している。ギャラティンの「正直」という美徳が18世紀の精神を代表する「正直」な祖父によって賞揚されたというエピソードを，『ギャラティン伝』の最後に置くことによって，18世紀の精神に憬れるヘンリーもまた，この「公徳」が共和国に

必要不可欠の要素であることを明らかにしている，と言えるのではないか。あのきわめて神話的なジョージ・ワシントン像を描きあげた M. L. ウィームズと，科学的歴史主義を目指したヘンリー・アダムズがともに「正直」という美徳を重視している点でまったく一致している事実に注目すべきだろう。「アダムズは，共和国に対する美徳の重要性を強調する，ポリュビオス以来の古い共和主義の伝統に属していた」[9]とは，クッシング・ストラウトの指摘であった。

アダムズが『ギャラティン伝』を完成した当時のアメリカは，金メッキ時代の堕落と混沌のなかに埋没していた。「果てしない腐敗」のはびこるアメリカ社会を彼は「下劣な腐敗の，不潔な下水だめ」[10] と呼んでいたが，そこには美徳の共和国の生き延びる余地など残っていなかった。そのような時期に，「偉大で純粋な社会」を構築しようとした政治家が忘れ去られていたとしても不思議はないが，その政治家の伝記を敢えて書きあげるという反時代的な姿勢をとることによって，アダムズはアメリカ合衆国の進むべき道を模索しようとしていた，と言えるのではないか。そこに読者はアダムズ自身の理想主義を読み取ることができるのである。だが，ほぼ30年を隔てて発表された自伝『ヘンリー・アダムズの教育』には，ギャラティンの名前はわずか一箇所しか言及されず，「彼はたしかに，アルバート・ギャラティンについて大部の研究をしたり，細密な肖像を描いたりしたこともあった」[11] と書かれているにすぎない。このいかにも素っ気ない書きぶりは，晩年のアダムズがギャラティンの抱きつづけた「人間性に対する信頼」を共有できなくなっていたことを暗示している。世紀転換期アメリカの困難な「状況」なかで，アダムズは失敗に終わったみずからの生涯と合衆国の未来について「非常に不愉快な結論」を下すばかりであったにちがいない。

ともあれ，『ギャラティン伝』は，その主人公が1879年の時点におけるアダムズにとって，美徳の共和国を象徴する理想の政治家であったことを物語っている。それは，『アメリカ合衆国史』のなかで，「一つの共和制度のなかに大陸

の半分を包含しようという実験」をアメリカの「大いなる一歩」[10] と呼んでいた歴史家アダムズによって，どうしても書かれなければならない一冊であったと言い切ってよいだろう。

注

(1) Henry Adams, *The Life of Albert Gallatin* (Peter Smith, 1934).

(2) Ernest Samuels, *Henry Adams: The Middle Years* (Harvard UP, 1958), p. 62.

(3) Samuels, p. 56.

(4) Cushing Strout, *The Veracious Imagination: Essays on American History, Literature, and Biography* (Wesleyan UP, 1981), p. 97.

(5) Henry Adams, *History of the United States of America during the Administrations of Thomas Jefferson* (The Library of America, 1986), p. 1126.

(6) Cf. J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition* (Princeton UP, 1975); Drew R. McCoy, *The Elusive Republic: Political Economy in Jeffersonian America* (U of North Carolina P, 1980); David W. Noble, *The End of American History: Democracy, Capitalisim, and the Metaphor of Two Worlds in Anglo-American Historical Writing, 1880-1980* (U of Minnesota P, 1985); Paul A. Carter, *Revolt against Destiny: An Intellectual History of the United States* (Columbia UP, 1989).

(7) Tony Tanner, "The Lost America: The Despair of Henry Adams and Mark Twain," *Mark Twain: A Collection of Critical Essays*, ed. Henry Nash Smith (Prentice-Hall, 1963), p. 160.

(8) Samuels, p. 47.

(9) Strout, p. 98.

(10) Henry Adams, *The Education of Henry Adams*, ed. Ernest Samuels (Houghton Mifflin, 1973), p. 272.

(11) Adams, *The Education of Henry Adams*, p. 333.

(12) Adams, *History of the United States*, p. 52.

——文学部教授——